

馬匹にいたるまでことごとく接收され、丸腰極めて淋しい捕虜生活となった。

噂には日本兵は絶対帰国することは得ず、一生中国のクリーとして酷使されるとか、幸いにしてデマであった。支那軍により強い私物検査も数回、六か月余の捕虜生活も苦難の中に終え、昭和二十一年三月八日辰巳第三師團長閣下のお計らいで連隊長以下全員ウースンの港を米國LST貨物船に乗船し、三月十一日懐かしの九州博多港に上陸、感慨無量で故国の土を踏んだ。

日赤看護婦より防疫を受け、臨時列車にすし詰めに乗せられた。窓硝子一つないし、座席の敷布も一枚もない。途中原爆の広島街は跡かたない瓦礫ばかりの惨状。涙なくして見られない。大阪駅に到着、奈良県着中町出身の杉本裕一連隊長殿とも一年八か月の主従のお別れ。三月十三日懐かしの両親の待つわが家に無事生還し、涙ながらに語らい、神仏ならびに先祖に礼拝した。

## 丸亀歩兵第十二連隊激戦回顧

香川県 浮田 信茂

揚子江の濁水は滔々として支那海に注ぎ、黄色い波となり騒ぐ。万里の波濤を蹴って洋上十幾日、限らない支那海をにらんで上陸の一日も早からんことを願う。安達部隊の意気は将に衝天の感がある。輸送船は下弦の月光こうこうと照る揚子江を静かに漕ぎ過ぎて声もない。人影も見えない。

故郷を偲ぶのも今宵限りだ。戦友は最後だよと互いに手を固く握りしめる。いよいよ明日だ。血なまぐさい戦場が待っている。さあ黄海の激流に親をも忘れ、可愛い妻子を捨て、陛下にこの身を捧げよう。東天は白み眼鏡で見渡せば、呉淞鎮は全く廃墟と化し人影もない。

「上陸開始」緊張した上官の号令。陽光を斜めに銃剣は白く光る。上陸船に乗り移り、思わず銃を力一杯握りしめる。鉄かぶとの紐を締めるのは伊達ではない。上陸最

初の砲弾が至近に落下して轟然と炸裂する。夜に入り呉淞鎮日華紡績で宿営する。

砲弾は子守唄なんて考えは微塵もない。明くれば昭和十二年九月四日、戦闘準備は全くなり、命令を待つ。

前面の敵を攻撃して浅間部隊と連絡して羅店鎮にある主力と合流せんと夜間に乗じて前進を開始する。迫撃砲落下の夜道を一步一步踏みしめて前進する。我らは初陣であり、戦争の初年兵だ。弾の道も何のその。当たればそれまでだ。攻撃命令は五日午前九時に出た。敵弾に第一線も第二線もない。金比羅様のご加護を信ずる我らには当たらない。ぐんぐんと部隊から部隊へと奔走のごとくなだれ込む。「俺も本当の歩兵部隊になったぞ」と思うと嬉しくなった。

この戦いに砲兵の協力なくして西門大街及び呉家上樓に達したのは不思議なくらいだった。全軍意気旺盛だ。

この戦闘で敵陣に斬り込み壮烈な戦死を遂げた五島、六車、中條軍曹の勇姿を忘れることは出来ない。敵の虚をつき最初の白兵戦を断行した安達部隊の猛進出によって、沙龍口も我に帰す。

これで目ざす宝山城は孤立し落城寸前、夕日に赤く染まった宝山城が痛ましい。

土民及び敵軍は散を乱して本道に沿い逃げるを梶佐古部隊は約四百人捕えて武装解除する。元来、西大門街は相当錯雑し通過困難で、外壕の橋は焼却されていたため相当戦死者を出し占領する。宝山城に入場もそこそこに、休む間もなく一路月浦鎮へと駒を進める。水筒の水もなく焼け付くような咽喉をつるはずのは高粱の幹あるのみ。わずかな水氣を得んと茎にかじりついた時は、ひょいと故郷の縁日に買った砂糖黍の味を思い出す。

九月七日早朝から道下部隊を右一線、王深―曹塘の間に、また梶佐古部隊を左一線、四塘橋―盛宅の線に展開させ、砲兵の援護射撃と共に攻撃を開始した。正午すでに田中隊は南方を、無名部隊は池田隊、金家宅は小川隊で漸次敵に近迫し、ついに白兵戦を展開し黄家宅も壊滅した。敵の物凄い包囲射撃を冒して突進する。

当時、曹塘堂東の無名部落には多数の迫撃砲を集め、猛烈な集中射撃を続けたために、部隊東部附近でさえ盛んに砲弾が落下し、炸裂の音は天地に轟き凄惨であった。

四塘クリーク西岸西塘堂に進出し、隊長は軍刀を振りかざし、兵は銃剣を光らせて弾雨を浴びて前進を続けるうち、江藤中尉は数弾を浴び、兵もまた壮烈な戦死を遂げた。だが自動火器の威力熾烈で、突撃の機熟せず夜に入る。

敵前に無気味な対峙を続けて夜を徹した。

弾の喰りは物凄く間断なく飛び散り、機銃がパッパッと赤い火を吐く。一尺余りの綿の木が草のなびくように飛び散る。その綿畑に食い付いたように鉄かぶとが散在する。一寸一寸と匍匐前進である。敵弾の無気味な弾着の音が絶えない。五尺の身の置きどころもない。「死ぬかも知れぬ」冷たい鉄のような緊張だ。兵士の目は火のように燃えている。「畜生」右肩に貫通銃剣を負って打ち伏せた戦友が再び這い出し、顔も軍服も血と泥で真っ黒だ。飯包帯も出来ない彼はついに護国の鬼となる。

九月八日敵の火力は依然として熾烈を極め、払暁を期して陣地占領を目指したが敵も頑強に抵抗し、容易に攻略することが出来ない。あたら戦友の犠牲を重ねるのみ。

田中隊の周家宅攻撃は壮烈というべきであった。

夕日赤く江南を染めるころ戦車の協力を得て最後の猛攻を断行し、田中隊は目指す周家宅を、梅里隊は南方無名部落をそれぞれ占領し戦友と万歳を絶叫した。

周家宅には掩蓋銃座を作ること二十四、梅里隊の無名部落十数個、金家宅及びその北方附近は優に支那軍一個師団半余の自動火器を有し、しかも掩蓋銃座たるや視界を避け、砲兵射撃が困難な堅固なるものであった。

激戦終わり陽光静かに沈むころ、周家宅の竹林に輝く日章旗を掲げ、「君が代」を高々と奉唱し、勝ち残った勇士もこれに唱和した。讚州健児の攻撃精神と不撓不屈こそ真意気である。

向井部隊の白兵戦、堅陣何者ぞ。鉄条網を切れ、掩蓋銃座を踏み潰せ、と隊長の号令一下銃剣をきらめきて屍骸の山を築き血の河を流す。白秋少尉とともに勇士は敵陣に飛び込んだ。忠魂江南に散って再び帰らず。冷たき雨の夜の行軍。どこまで続くぬかるみぞ。二日三夜の激戦に死んだ友は幾人か。

第一大隊長の指揮下の将兵大いに鼓舞し、浦橋の攻撃を続け、終に占領した。この戦闘は実に手榴弾戦で、

その壯絶言語に絶するものがあつた。この日の戦闘後十日も休むことなく、梶佐古部隊は第一線にあつて顧家宅を、加川部隊は王家宅、真家宅を攻撃する。夕刻まで占拠し、翌十一日も北曹宅、南曹宅を陥落させる。池田隊は千田を匍匐し、一挙に敵陣地を奇襲したのである。

酷熱焼くごとく、夕日西に沈むころともなれば涼風戦陣を渡つて心地よい。物凄い火炎は天を押し、黒煙は月浦鎮の空を赤く染めて覆う。月浦鎮の南側に沿い潜入し敵の退却を発見し、部隊は時を移さず追撃する。部隊は歩兵第四十四連隊と合流し羅店鎮に向かう。クリークの兩岸に数層ごとに放置された機関銃座が幾千層と続いている。好天に恵まれた天候も十三日夕方より雨となる。

雨をついて敵機五機飛来、地上攻撃して去る。一機は撃破する。歩兵部隊がその主力の天谷部隊と合流する。

十五日午前二時ごろ敵は猛射を開始し、疲労する我らを休ませず迫撃砲は身辺に雨のごとく落下し耳をつんざくばかり。第一線部隊は泥上に膝を没す。夜を期して攻撃に移る。十三、十四の両日に我が部隊に抵抗した敵は十四、九十八、九十九師で一萬を下らない。

第三大隊は午後一時を期し攻撃を開始、砲兵の協力により小顧家宅を攻撃し、前日にまして銃砲撃は江南の天地に轟き、部隊一斉に猛攻を繰り返し、午後三時同地を占領。敵は三〇〇の死体を残して敗走した。

この日は朝来の雨が激しく、戦場は密雲低く垂れ、視界がきかず、勇士の征衣は雨に濡れてカーキ色も黒色に変じ、鉄兜よりしたたる露は、肩に背に、そして胸にまで染み込んで冷たく、実に涙ぐましい戦闘であつた。

一方、梶佐古部隊（第二大隊）は黄家宅に夜襲。しかし敵の夜間反撃は猛烈を極め、第一中隊が右に、第二中隊は左に猛攻。決死の勇士たちは泥濘膝を没し、闇に乗じ突入、午後十一時ごろ、両三日を要したこの陣地を占領した。

十九日の朝、眼前に敵を控え、安達部隊には絶えず敵弾が落下する。その一つが部隊長の机の上にあつた小瓶に命中して飛び去る。この朝、部隊伝令の寝ていた付近の藁の中から手榴弾五個を所持せる一名の敵を発見。危機一髪のところだった。明日を知らぬ草枕で露宮の夢に「勝ってくるぞと」心に誓いし友に励まされ征途につ

いた時の感激が夜毎に勇士の胸に甦る。雲井遙かに掛る月を眺めると、一条の雁が飛ぶ。そぞろに思う故郷の山河も最早生きて見られないだろうと。

その後幾多の激戦、小戦闘、追撃戦の後、十一月二十九日午前十時道下隊は常州に進入し、その後も会心の攻撃を続け凱歌を奏す。この街は遠く千五百年の昔、仏道を極めるため支那を訪れた僧空海、弘法大師の修業の霊地であり天寧寺の大伽藍が聳えている。

焦山砲台の攻撃命令により第二大隊は鎮江を出発、焦山砲台を攻略し、揚子江の航行権を確保する。

昭和十三年一月十四日揚州城を後に首都大南京城に連隊旗を先頭に堂々の入城、勇士の目には感激の涙が溢れる。護国の鬼と化した戦友よ、我らとともにこの喜びを分けあってくれ。

## 洋菁墟の戦争

香川県 田中 優

不寝番に起こされて、目をこすりながら何事かと聞けば、大隊本部よりの電話連絡で電話線を切断されたので、直ちに一個分隊をもって潜伏斥候を出せとの大塚副官からの命令。

松崎軍曹以下十二人が選抜された。自分は軽機の射手であるが、宇都宮一等兵の軽機であるので弾薬手となり、宇都宮が射手で、一番は新名兵長、二番宇都宮、三番田中上等兵の順。まず完全防音装備のため地下足袋に巻脚絆、帯剣は布片を巻き軽装で中隊兵舎前に整列する。絶対に声を立てぬことなど注意伝達を聞き出発だ。時に午前三時三十五分。夜半の月はもう西に落ちて、真の闇である。絶対に音を発してはならぬので、抜き足差し足で、少し前進しては停止、前進しては停止を繰り返す。なんと今夜の静かなことか。嵐の前の静けさともいえる無